

サンキュー・スモーキング

2006(平成18)年8月30日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督・脚本=ジェイソン・ライトマン/原作=クリストファー・バックリー『ニコチン・ウォーズ』(東京創元社刊)/出演=アーロン・エッカート/マリア・ペロ/デヴィッド・コークナー/キャメロン・ブライト/サム・エリオット/ケイト・ホームズ/ウィリアム・H・メイシー/ロバート・デュヴァル/J・K・シモンズ(20世紀フォックス映画配給/2006年アメリカ映画/93分)

……タイトルだけを読めばたばこ讃歌の映画のように思えるが、さにあらず……。また話術を武器にたばこ研究アカデミーの広報部長として活躍する主人公は、悪徳企業のお先棒かつぎのようにも思えるが、さにあらず……。この映画がアピールするテーマは奥深くかつ実に人間的なもので、アメリカで大ヒットしている理由もよくわかるというもの。たばこを吸う人も目下禁煙中の人も、そして子供の喫煙に悩んでいる人も、この映画を観てたばこの害についてよく話し合ってみれば……。

たばこの有害性へのアプローチはさまざま……

インサイダー(内部告発者)となってたばこの有害性を訴える2人の男を主人公にした社会派ドラマの最高峰が『インサイダー』(99年)だったが、この映画はタイトルからみる限り、たばこ讃歌の映画のように見える。また主人公のニック・ネイラー(アーロン・エッカート)は、たばこ会社が出資するたばこ研究アカデミーの広報部長として論陣を張り、日夜たばこ擁護のために働いている人物。そのニックが自分の武器として使うのは、あくまでディベートを含めた話術。

「情報操作の王」の異名をとる彼の話術を、「論理のすり替え」というのか、「丸め込み」というのか、はたまた「詐術」というのかは別として、その説得力は大したもの。もっともパンフレットにある原作者クリストファー・バックリーの解説によると、これは「スピニング」すなわち「動詞および名詞。世論に都合

の良い影響を与えるため、偏った解釈を加えたり歪曲した状態で情報を流したり、他者の発言や行動をそのように解釈すること、そのようにして提供された情報」をいうらしい。たばこの有害性へのアプローチは実にさまざま……？

モッズ特捜隊とは……？

ニックがたばこ擁護論者(?)なら、「ワインの聖母」ことアルコール業界のPR ウーマンがポリー・ベイリー (マリア・ベロ)。そして銃製造業界のPR マンがボビー・ジェイ・ブリス (デヴィッド・コークナー)。そりゃ3人とも疲れる仕事だろうと思うが、そんな同情など不要とばかりに開き直ってこの3人が結成しているのが「死の商人 (Merchant of Death)」の頭文字をとったモッズ特捜隊。1週間に1度開く3人の飲み会での語らいこそ、彼らが唯一本音を出せる場であり、ストレス発散の場となっていたのは当然……。

ニックの任務は？

昨今のたばこをめぐる厳しい情勢の中、ニックの上司BR (J・K・シモンズ) からではなく、たばこ研究アカデミーのザ・キャプテン (ロバート・デュヴァール) から直接ニックに与えられた任務は2つ。その1は「映画の中でスターにたばこを吸わせよう」という「スモキング・ハリウッド」作戦の実行。そしてその2は、癌を患い、たばこ業界を訴えようとしている初代マルボロ・マンのローン・ラッチ (サム・エリオット) を買収すること。

2つともかなりハードな任務だが、海千山千のニックなら大丈夫……。その胸のすくような話術の展開ぶりは、スクリーン上でたっぷりと。

スクリーン上で展開されるニックの見事な話術を観ていると、今年夏の関西学院大学法科大学院での都市法の集中講義の中で学生たちのプレゼン能力の不足を痛感したばかりの私は、この映画を法科大学院の授業用として十分活用できるのではないかと思いついてしまったが……。

親が親なら息子も息子……

なぜかはわからないがニックはバツイチで、週末だけ12歳の息子ジョーイ・ネ

イラー（キャメロン・ブライト）と会うことが許されている立場。普通なら、マスコミがこぞって悪者だと攻撃する父親をもてば、息子は父親に反発するものだが、ジョーイはなぜ父親が世間から嫌われているのかをきちんと知ろうと努力していた。そして学校で、そのディベート能力を開花させてきたジョーイは次第にニックの仕事に関心をもち始め、「スモーキング・ハリウッド」作戦のためにロサンゼルスに行くニックと同行することを希望した。そして、それに反対する母親を「別れた夫への憎しみで僕を止めるならあきらめるけど……」と見事に論破したジョーイは、その旅の中で父親の実像をしっかりと勉強することに……。その結果ジョーイの人生観が大きく広がるとともに、ディベート術も急速に上達し、大会で優勝するほどに……。こりゃまさにいい意味で、父親が父親なら息子も息子……。

ドクロ・マークの法案は……？

内閣提案の法案が圧倒的に多い日本と異なり、民主主義の国アメリカでは、議員が法案を提出する議員立法がメイン。そして、自分自身の名声のために「反たばこ法案」を通そうとしているのが、チーズが名物のヴァーモント州から選出されているフェニスター上院議員（ウィリアム・H・メイシー）。その法案は、「1年以内にすべてのたばこの外箱に『ドクロ・マーク』を！」というキャッチフレーズで急速に支持を広げていた。またアメリカではこれも日本と異なり、法案を通すための手続の1つの公聴会が立派に機能している。そこで、公聴会の参考人として呼ばれたのがニック。この公聴会での丁々発止のやりとりも、法科大学院での授業のネタとして最適……。

女性記者はベッドの中でも取材……？

2006年8月24日付新聞各紙はトム・クルーズの「目に余る奇行」を報じたが、そのトム・クルーズとの交際と出産で大きな話題を呼んだのがケイティ・ホームズ。プレスシートによると、彼女はケイティからケイトに改名したらしいが、それは何のため……？

それはともかく、このケイト・ホームズが演ずるのが、ワシントンD.C.の有

力日刊紙の調査報道記者ヘザー・ホロウェイ。この調査報道記者というのは耳慣れない言葉だが、ヘザーは「取材のためなら手段を選ばず」のすご腕らしく、ニックへの取材については、その美貌と見事なオッパイで華々しい戦果を……？すなわち、テレビのディベート番組でフェニスター上院議員をやりこめたニックは、取材をきっかけにベッドを共にするまでの仲になったヘザーと熱く燃え上がったが、ある日、その日刊紙に載った暴露記事には、何とニックが寝物語に語った数々の内幕が生々しく……。こりゃヤバイ……。男が失敗する三大要素は酒、オンナ、バクチだが、その中で圧倒的に致命傷となるのがオンナ。これによってそれまでの名声（？）がふっとんだばかりか、ニックはたばこ研究アカデミーもクビになり失意の日々を……。さてニックはそんな状態から立ち直ることができるのだろうか……？

ニックの立ち直りは息子の言葉から……

今やニックはまさに四面楚歌状態で、モッズ特捜隊の仲間からも愛想をつかさされる始末。しかし、仕事も恋（？）も友情もすべて失ったニックの前に現れたのが息子のジョーイ・ネイラー。ジョーイはかつてニューズウィーク誌に「情報操作の王」と書かれたことのある父親を尊敬していると宣言し、しかし「今のお父さんは自分で自分のみじめさに酔っている」と手厳しくも正当な批判を……。息子からの「パパは最高！」という誉め言葉がニックの心を感動させたのは当然。本来立ち直りの早い（？）ニックが巻き返しのためにとった作戦も鮮烈なものだった……。

その第1はヘザーの肉弾取材を逆にテレビで暴露。その第2は、もはや出席不可能と見られていたフェニスター上院議員の公聴会への出席宣言。さてニックの復活はあるのだろうか……？

この映画が描こうとするテーマは……？

この映画は冒頭で書いたように、タイトルを読みニックの活躍ぶりを観れば一見たばこ擁護論を描こうとしているように見えるが、実はそうではない。ニックがたばこにドクロ・マークをつける法案に反対しているのは、そんなことをする

のが本質的問題ではないと考えているため。ニックの話術によれば、それなら交通事故をおこす車にも、食べ過ぎて病気の元になるヴァーモント州名物のチーズにもドクロ・マークをつけなければならないことになってしまう……？

たばこの有害性は既に国民に十分認知されているもの。したがって、フェニスター上院議員からの「あなたの息子さんが18歳になってたばこを吸いたいと言ったら、あなたはたばこを与えますか？」との質問に対するニックの答えは、決して論理のすり替えや詐術そしてスピニングなどではない極めて正当なもの。すなわちそれは、「息子の自主性に委ね、息子が欲しいと言えば与えます」というものだった。なるほどこの映画が描こうとしたテーマはこういうことだったのか……？

2006（平成18）年8月31日記

ミニコラム

「たばこ1箱千円法」の提案

たばこにドクロマークをつける法案より、もっと直截に私は「たばこ1箱千円法案」を提案したい。たばこは現在1箱300円前後で、これまでの値上げ幅は30円前後の微々たるもの。千円という設定は、実験的なもので、たばこが売れなくなること、製造できなくなるのが最終目標。そこで価格を3倍にすれば販売量が1/3になるのか、10倍にすれば1/10になるのかを社会的に実験していくことが当面の目標だ。この法案のメリットは、これによってたばこを吸う人がゼロに近くなるため、国民の健康が増進され長寿になること。それによる労働力の増加と医療

費・社会保障費の大幅抑制という経済波及効果は絶大だ。これに伴って日本たばこ産業（JT）は最終的に解体されるから従業員の再雇用体制の構築が必要だし、税収もゼロになってしまうが、たばこ絶滅に伴う経済効果はそんなマイナスを補ってあまりあるはず。石原慎太郎都知事三選阻止を叫んで浅野史郎氏が立候補したが、石原氏特有のトップダウン方式は、国に先駆けたディーゼル車の排ガス規制のように大きなプラス面があったはず。坂和法案成立のためには、そんなリーダーシップをもった政治家が不可欠だが……。

2007（平成19）年3月9日記